

「ポスト真実の時代に」

2017年01月20日

「東京新聞」（17日の朝刊）は「深い言葉が生まれる瞬間」という見出しで下記のように書き出している。「『ポスト真実』の時代だという。客観的な事実が重視されず、感情や信念へのアピールが世論形成に力を持つ時代。われわれは何を、どう見据えればいいのか。三人の海外の識者に混迷する世界への視点を聞く。」「ポスト真実（Post Truth）」とは、よくもネーミングしたものだと思う。安倍首相は、オリンピック・パラリンピックを導入するために福島原発を「アンダーコントロール」と言った。また、「強行採決はしたことがない」とも言った。呆れ果てて、言葉を失った。米国の大統領選挙でも、根も葉もないデマが飛び交い、混乱を極めた。まさに「ポスト真実」の時代である。それ故に、真実の言葉を紡ぎ出そうとする思いに駆られよう。

「東京新聞」は海外の識者の最初に、『チェルノブイリの祈り』で、2015年のノーベル文学賞を受賞したベラルーシの作家スベトラナ・アレクシエービッチ氏のインタビューを掲載している。彼女は「私が関心を持っているのは『魂の歴史』。大きな歴史が見逃したり見下したりする側面です」と語っている。彼女の最初の作品は『戦争は女の顔をしていない』である。第二次大戦で100万人以上のソ連女性が戦場に赴いた。彼女たちにインタビューし、ただの人たちが経験した悲しみ、喜び、苦悩から権力の横暴や戦争の実態を浮き上がらせている。『チェルノブイリの祈り』も、原発事故の処理のために犠牲を負った夫について語る妻の悲しみから書き始めている。そして、被爆した人々の声を克明に報告している。彼女は「人間は大きな歴史の中では一粒の砂にすぎませんが、小さな歴史から大きな歴史が生まれるのです。一人一人を通して見ること。百万人単位で見ても、ものは見えてきません」と語っている。

また、アレクシエービッチ氏は、フランスのヤン・アルテュスベルトラン監督が制作した『ヒューマン』という映画を賞賛している。その映画には日本原水爆被害者団体協議会代表委員の坪井直氏も出演している。だが、語られているのは広島原爆投下という「大きな歴史」ではない。坪井氏は被爆者であることを理由に結婚に反対され、恋人と「あの世で一緒になろう」と睡眠薬を飲んで心中を図った。彼らは意識が戻り助かったが「私たちの運命は悲しいじゃないか」と泣いた。その後、二人の結婚は許された。坪井氏は「何か苦しいことがあっても、あの時のことを思えば我慢できる」と語っている。大きな歴史的事件としてではなく、歴史的事件の背後で人間がどのように生きているかを語る言葉から、歴史は見えてくる。アレクシエービッチ氏の一人一人を見据えた視点が「ポスト真実」を超え、真実の言葉を生み出す瞬間になろう。

アレクシエービッチ氏は下記のようにも語っている。人々は先が見えず、恐怖を感じている。その時「私はどうすればいいかを知っている」と豪語する者が指導者になる。彼らの解決法は過去にあったことに救いを求める。この意味でプーチンもトランプも似ている。彼らは過去の栄光を取り戻そうとしている。「国民はプーチン大統領の言葉に耳を傾けませんが、知識人の言葉は理解不能とされています。知識人は当惑し、沈黙しています。一番恐ろしい対立は、私たち知識人と国民との対立なのです。」考えさせられる言葉であるが、知識人と国民の乖離は知識人にも責任があるのではないか。アレクシエービッチ氏は国民の立ち位置に立って対話をしている。知識人は高みに立たず、生活を共にし、共有の言葉を見出すことを心掛ける必要がある。